



## ビルマで歌を学ぶ

井上 さゆり (いのうえ さゆり)

日本学術振興会特別研究員  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

### 教えたくなるまで待つ

ビルマの文化大学は、ヤンゴン市内の人もほとんど訪れないような郊外にある。建物と人が密集したヤンゴン市の中心部の方がまだ緑が多いと感じるくらい木が少なく、雨季にはぬかるみに、他の季節には埃と日差しが強さに悩まされた。大学の校舎は二棟でさほど大きくない。しかし敷地自体は広く、敷や

### お漏らしを誘う迷唱

先生の唯一の孫である長女の息子は、当時四歳だった。生まれてすぐにかかった高熱のために麻痺が残り、ことばが話せず寝たきりだった。家族全員からとても可愛がられていた。愛くるしくいつも笑っている。わたしのことを気に入ってくれたようで、行くところをほこらせて喜んでくれた。そのうち、わたしが歌い始めると必ず小便をするようになった。ビルマでは、ぶつうオムツは使用せず、そのまま垂れ流しである。先生の膝の上で抱かれていればそこに流れる。わたしが先生の歌を真似て歌い始めてしばらくすると、その子が小便をする。先生の膝の上で笑った場合は、「わっ」と言いながらも笑って着替えに行く。床にした場合も、その子の着替えをしなければならぬ。そんなことで、しばしばレッスンを中断する。ふだんはあまり小便をしなくて困っていたそうであるが、わたしが歌うと三回くらい同じことが繰り返される。わたしはすっかりその子の小便係として絶大な信頼を置かれるようになった。

その子は話せないが、言われることは理解していた。わたしの歌が下手なため、先生がわざとその子の前で「こんなできないなんて、インインエー(わたしの名を叩いてやる)」と言ったり、実際にわたし



文化大学の校舎から見た敷地。ほつりほつりと建っているのは教職員の住居



大学内の食堂で、毎日、紅茶を飲みながらおしゃべりをする



中央の小屋は大学の食堂



豎琴の教室

豎琴の授業。先生が弾いたものを真似して覚えていく



のお尻を叩いたりすると、目にいっぱい涙を浮かべて悲しい顔をして泣き始める。自分はいくら怒られても、軽く叩かれたりしてもニコニコしているのに、他の人が意地悪されたり嫌な目にあったりしていると泣き出すと言う。先生が「大丈夫、叩かないよ」と言っていると安心して

泣き止む。小さな子を泣かせるまでからかうのにもびつくりしたが、その子の優しさが心に響いた。二年間の留学を終え帰国して一年後、その子が亡くなったと聞いた。それから二年ほどして訪ねたら、一歳になるそっくりの男の子がいた。その後生ま

れた先生の孫だと言う。健康に育ち、よちよち歩きをしていた。皆が、あの子の生まれ変わりと聞いた。あの子そっくりの利発そうな表情と優しい笑顔に、わたしもそう思った。

沼も広がっている。そして、一部の教職員が住むために建てられた家もある。わたしの歌の先生の家も、そのうちのひとつであった。

大学のカリキュラムを消化するには授業では足りず、多くの学生が同じ教師にプライベートでも教えを請う。わたしは一九九九年から二〇〇一年のあいだ唯一の留学生だった。授業はビルマ人学生とは別に個人で受けていたが、それでも授業時間だ

けでは足りず、数名の先生に交渉してプライベートでも教わることにした。四時に授業が終わる、歌の先生の気がむきさえすれば、家に来いと言われる。しかし、その前に、大学内の食堂で先生と一緒に紅茶を飲んだり、そこに他の人が加わっておしゃべりが始まったり、先生が教えたくなるまで待つのがふつうである。

### 師と家族ぐるみのつきあい

ビルマの古典音楽は、楽譜を用いず口承で伝えられる。古典音楽とはすなわち歌謡である。有名な豎琴をはじめとして楽器は、歌とともに奏されるためにある。そのため、歌手も楽器奏者もまず歌を覚える必要がある。歌を学ぶ者も、楽器の奏法を学ぶ者も、先生が「フレーズずつ演奏して聞かせる曲を真似して覚えていく。完全に暗記し、考えなくても口や手が動くようになるまで練習を重ねる。わたしの教師たちも、最初はそのまま師の家に住み込んで雑用をしたり、一緒に演奏活動について行ったり、とにかく師とともに過ごすことで、曲や演奏技術を学んできた。師とは自然、家族ぐるみのつきあいとなる。こうして師から知識を授かって、それが自分の財産となる。

ビルマの古典音楽の歌唱を学ぶには、歌詞だけが記された歌謡集が教科書である

る。歌詞をそれに頼りながら、先生が歌って聞かせる各フレーズをすぐに繰り返して間違えれば直される。その繰り返しで旋律と歌唱法を覚える。同じ旋律が他の作品に用いられている場合も多いので、きちんと覚えていないと、いつのまにか他の作品を歌い始めていたりする。大学では毎日一時間ほど歌のレッスンを受けていたが、一度は覚えても次の日になると忘れていくことも多く、とにかく先生に密着して訓練してもらうしかない。わたしは歌と豎琴を大学で学んでおり、土日に豎琴のプライベート・レッスンを受け、平日の放課後はほとんど歌の先生の家に住んでいた。

先生は五〇歳前後の女性で踊りも教えており、いつも綺麗にお化粧をし、きちんと身だしなみを整えていた。家族構成は、ご主人と高校生の息子一人、小学生の娘一人、結婚した長女とその夫と子どもであった。歌の先生の家では、ビニールのシートを敷いた木の床に、小さなちゃぶ台を置き、先生と対面してレッスンを受けた。スイーという小さいシンバルとワーというカスターネットを両手にもってリズムをとりながら歌う。スイーとワーの打ち方、順番は、歌ごとに決まっているので、これも覚えなければならぬ。ちゃぶ台の上においた歌謡集にスイーとワーの箇所をメモしながら練習する。